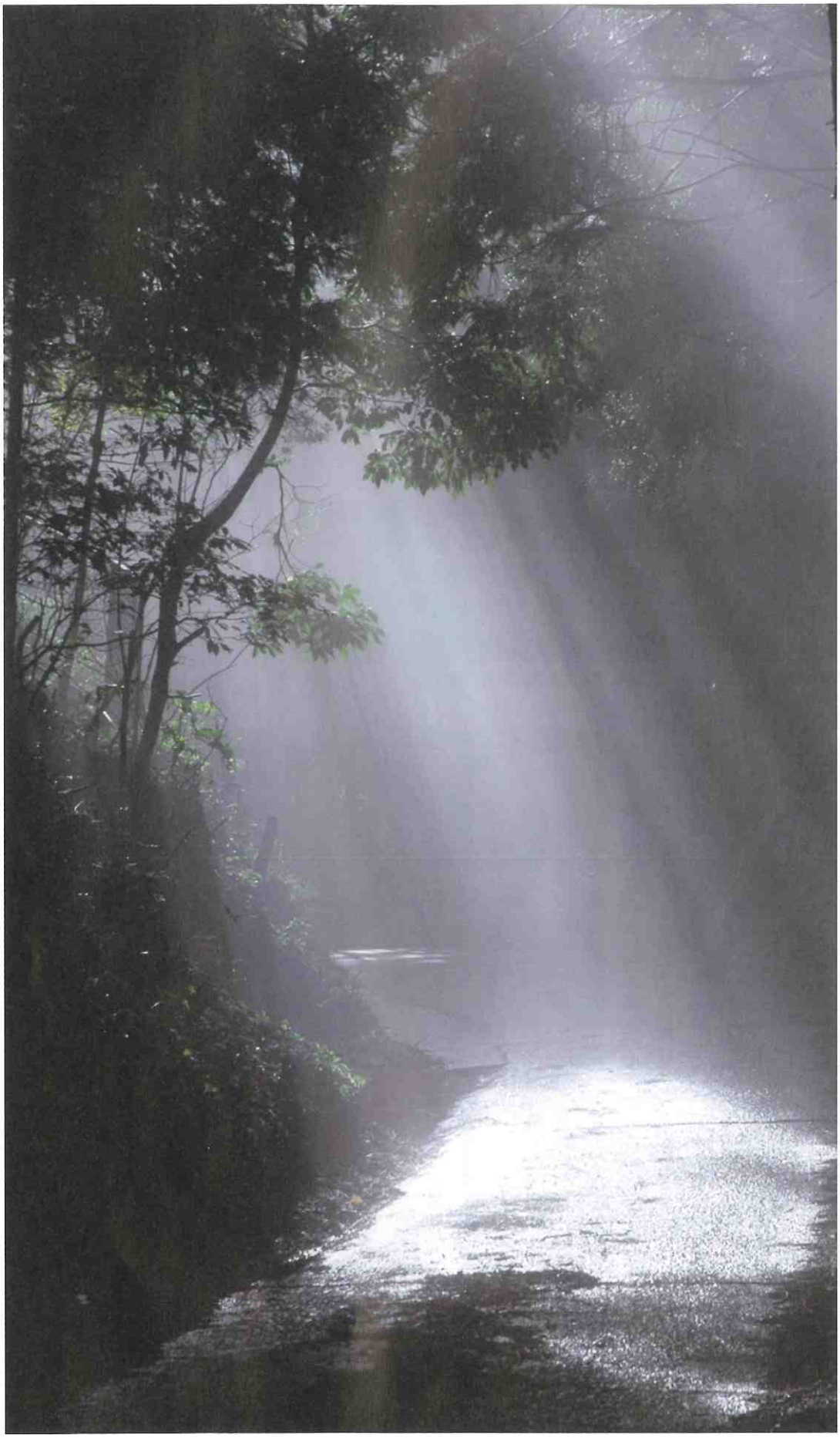
霊宝館だより

霊宝館だより　第80号
平成18年7月10日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
(財)高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736―56―2029



朝日に輝く神谷街道（殉難七士の墓横にて）　関連記事は8頁

第27回大宝蔵展

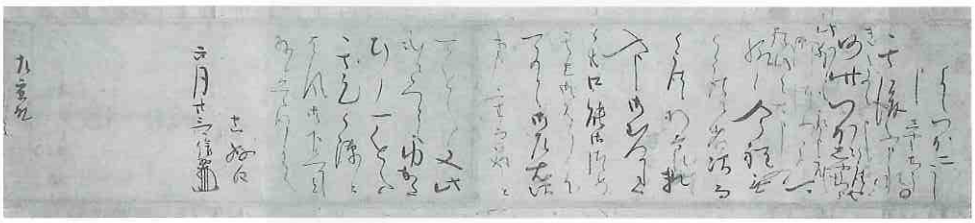
「高野山の名宝」

平成18年7月16日(日)～9月18日(月)まで

仏教美術の大殿堂　第27回大宝蔵展

「高野山の名宝」
聖山霊場高野山の信仰の美

国宝　阿弥陀聖衆来迎図　有志八幡講



県指定　真田幸村書状（焼酎の文一巻　天野詣りことわり状二通）　蓮華定院

蓮の花びらのように峰々が囲む山上の「聖地高野山」は、平安時代はじめの弘仁七年（八一六）に、弘法大師空海（七七四～八三五年）によって真言密教の修禅の道場として開創され、金剛峯寺が建立された霊場である。以来、幾多の盛衰をへながらも「聖地高野山」は、時代を超え、宗教宗派の垣根を越えて、篤い弘法大師信仰を礎に山上の宗教都市として発展した。その長い時の流れの中で培われてきたさまざまな信仰は、一方では「山の正倉院」と称されるにふさわしい仏教美術の大殿堂を築きあげた。

高野山では弘法大師空海が開創目的とした真言密教の修禅の寺院にふさわしく、曼荼羅に代表されるように、五色に彩られた豊麗な造形表現の密教美術の名宝が育まれた。また、高野の地で入定し生涯を閉じた空海に対して、延喜二十一年（九二一）に醍醐天皇から「弘法大師」の諡号を贈られたが、それ以降、人々の篤い弘法大師信仰の霊場として機能し、やがて、さまざまな信仰が同居する宗教サロン的要素を加味した霊山へと発展して、天下の霊場と称される地位を築いた。

日本を代表する聖山霊場として機能した高野山には、皇族をはじめ、貴族や武士、僧侶や庶民など、さまざまな人々が実に多く参詣した。そして、寺院の建立や数々の宝物類などが寄進された。また、高野山は、都から遠く離れた紀伊山地の山岳霊場であったことから、戦火を逃れて各地から宝物類が引き寄せられるように集まった。それらの、宝物類は各々の信仰の大切な証として守り継がれてきた。

今日、総本山金剛峯寺や塔頭寺院（子院）には、永い歴史の中で蓄積されてきた膨大な文化遺産が伝わる。その内容は、宗祖弘法大師空海にまつわる品々をはじめ、応徳三年

重文　長政夫人像（お市の方）　持明院

重文　浅井長政像　持明院

重文　浅井久政像　持明院

（一〇八六）に制作された日本最古の仏涅槃図や来迎芸術の傑作として有名な阿弥陀聖衆来迎図などに代表される仏教美術の名宝の数々、平清盛奉納の両界曼荼羅図や鎌倉時代の彫刻界の巨匠である運慶作の八大童子立像、快慶作の孔雀明王像などに代表される密教美術など日本宗教芸術を語るうえで欠かせない宝物類が驚くほど多く伝わる。

また全国に群雄が割拠した戦国時代に高野山と縁をもった武田信玄などの武将の肖像画や、池大雅筆になる山水人物図などの文人らが高野山に残した障壁画類など、実に多様な分野の文化遺産が膨大に伝わる。その内、国宝二十三件、重文百八十七件が国の指定を受けるなど、高野山は質量ともに日本を代表する宝物文化財の宝庫であり、そして山全体が歴史的景観が維持されている美の殿堂である。

このような、高野山の質の高い宝物文化財が伝存する実態をとらえて、「山の正倉院」と人々が賞賛する。この度の高野山大宝蔵展では、歴史に名を留めた人々に関係のある宝物文化財と、高野山において盛んであった弘法大師信仰をはじめ、密教信仰の中でも最も盛んであった不動明王信仰の関係宝物、仏教信仰の中で際立って盛んであった阿弥陀浄土信仰や文殊菩薩信仰などの宝物を展示し、高野山信仰で培われてきたさまざまな信仰の実態を紹介することにした。また、高野山に対する信仰にもとづき、各所から奉納されたさまざまな経巻類も合わせて一堂に展示して、高野山の聖山霊場信仰の一端を紹介することにした。

真田幸村像　蓮華定院

戦国武将と高野山

第27回大宝蔵展「高野山の名宝」見どころ紹介

大宝蔵展「高野山の名宝」の見どころをご紹介いたします。今回は、戦国武将達が高野山との関係の中で奉納したものや、その遺品についてスポットをあてて出陳いたします。なかでも成慶院の武田信玄像、持明院の浅井長政・同夫人像などの肖像画は、全国的にも有名なものとしてご紹介することができます。

古来、有力な武家と高野山の寺院間には、師檀関係や宿坊契約と呼ばれる一種の檀家制度が結ばれていました。その時期は南北朝時代以降のこととされています。戦国時代以降になると、諸国大名は競うように高野山の寺院を菩提所と定め、例えば武田家については成慶院、徳川家は蓮花院、真田家は蓮華定院といったように宿坊契約が結ばれました。奥之院の参道両脇奥深くにまで建っている、おびただしい数の戦国大名墓を目の当たりにしますと、こうした状況がよく理解できるかと思います。

興味深いのは戦国武将で敵対する者でも、それぞれ高野山の寺院との関係を維持していたことにあります。川中島の戦いで雌雄を決した上杉謙信と武田信玄を例に挙げますと、上杉謙信は無量光院の清胤を師としていたことが知られています。一方の武田信玄は、成慶院や持明院を宿坊、菩提寺として武田家から肖像画、遺愛品などの多くを奉納しています。こうした点に当時の人々のものの考え方が現れているように思います。

今回の「高野山の名宝」展全体の展示品数は、国宝九件、重要文化財（重文）二十三件、和歌山県指定六件、重要美術品一件、未指定品三十二件の合計七十一件、そして同時開催の平常展では、重文約二十件を出陳いたします。

こうした機会に是非、霊宝館へも足をお運びいただき、高野山の歴史的な魅力の一端を味わっていただきたく、お勧め申し上げるものです。

◆主な出陳品

〈国宝〉
- 山水人物図（襖）　江戸時代　遍照光院
- 興山上人応其覚書　江戸時代　金剛峯寺
- 豊臣秀吉朱印状　江戸時代　金剛峯寺
- 阿弥陀聖衆来迎図　平安時代　有志八幡講十八箇院
- 阿弥陀三尊像　鎌倉時代　蓮華三昧院
- 金銀字一切経　平安時代　金剛峯寺
- 紫紙金字金光明最勝王経　奈良時代　竜光院
- 大字法華経　奈良時代　竜光院
- 不空羂索神変真言経　奈良時代　三宝院

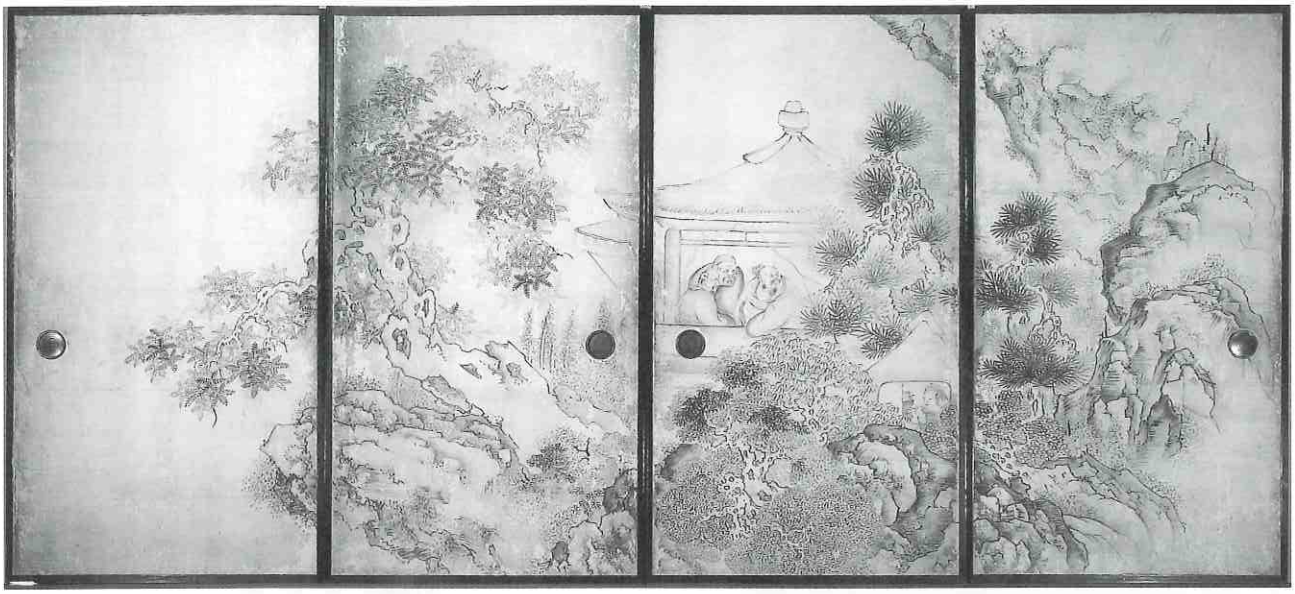
〈重要文化財〉
- 商山四皓及虎渓三笑図　江戸時代　遍照光院
- 鶏図屏風　江戸時代　宝亀院
- 法華一品経　平安時代　金剛峯寺
- 武田信玄像　桃山時代　成慶院
- 浅井久政像　室町時代　持明院
- 浅井長政像　桃山時代　持明院
- 浅井長政夫人像　桃山時代　持明院
- 九品曼荼羅図　鎌倉時代　清浄心院
- 弁才天図　南北朝時代　宝城院
- 不動明王三童子像　鎌倉時代　五坊寂静院
- 八宗論大日如来像　鎌倉時代　善集院
- 阿弥陀如来像　南宋時代　成福院
- 如来像　南宋時代　金剛峯寺
- 紅玻璃阿弥陀像　鎌倉時代　正智院
- 五大虚空蔵菩薩像　鎌倉時代　西南院
- 普賢延命菩薩像　鎌倉時代　正智院
- 八字文殊曼荼羅図　鎌倉時代　正智院
- 紺紙金字一切経　平安時代　金剛峯寺
- 細字金光明最勝王経　奈良時代　金剛峯寺
- 雑阿含経巻第三十九　奈良時代　金剛峯寺
- 後小松天皇宸翰秘調伝授書　室町時代　西南院
- 阿弥陀三尊像　鎌倉時代　五坊寂静院
- 十一面観音立像　平安時代　宝亀院
- 毘沙門天立像　鎌倉時代　正智院
- 毘沙門天立像（胎内仏）　平安時代　金剛峯寺

収蔵品の紹介 54

国宝

山水人物図
池大雅筆 十面の内
山亭雅会図 四面

紙本著色　江戸時代　遍照光院
各 縦168.0cm　横91.5cm



本図は池大雅（一七二三～一七七六年）によって遍照光院書院に描かれた襖絵の一部です。池大雅は江戸時代中頃に活躍した文人画家です。書家としても一流で、奥の院参道にある松尾芭蕉の句碑に刻まれる字は大雅筆とされます。なお文人画は南画ともいい、もともとは中国からもたらされた儒教をはじめとする高度な教養を身につけた文人が余技や趣味で描いた絵画を指しますが、日本に入ってからは独自の発展を遂げました。

本図は岩や樹木に囲まれた東屋で、三人の文人が窓から外を眺めつつ談話をする様子が描かれます。その下にはお茶を沸かす人物も見えます。墨の濃淡や彩色によって立体感を出し、また左方に大きく余白をとることで画面全体にゆとりと奥行をもたせています。

このような、俗世を離れた理想郷の情景は文人画によく見られますが、山々に囲まれ、世間とは一線を画す高野の地では人々の目にどう映ったのでしょうか。

この山水人物図襖絵には落款（署名や印）は見られませんが、遍照光院には筆料に対する大雅からの礼状が伝わっており、また画風からも大雅筆であることは明らかです。

遍照光院は慶長六年（一六〇一）に建物が焼失した後、小規模な堂宇が再建されていたようですが、宝暦六年から宝暦十一年（一七五六～一七六一）にかけて本格的な寺院再建が行われました。建物完成から数年後に大雅が寺の依頼を請けてこの襖絵が描かれたようですが、制作年は明らかではありません。

実物を見ないと分かりにくいですが、本図は金泥や代赭（赤褐色・黄褐色）・藍・朱などの彩色に加え、墨の微妙な濃淡によって奥に潜む彩色のゆらめきを自然に感ぜざるを得ない独特の世界が堪能できる名画です。霊宝館においては六年振りの展示となり、是非、間近で鑑賞されることをお勧めします。

（F）

連載

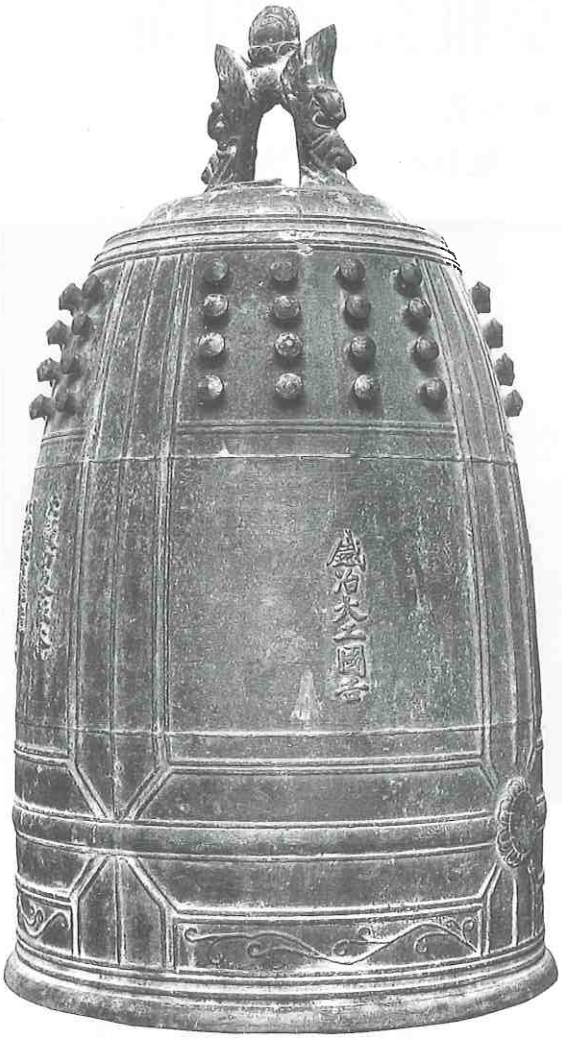
高野山の名鐘

其の3
永正元年在銘梵鐘

霊宝館副館長　井筒　信隆

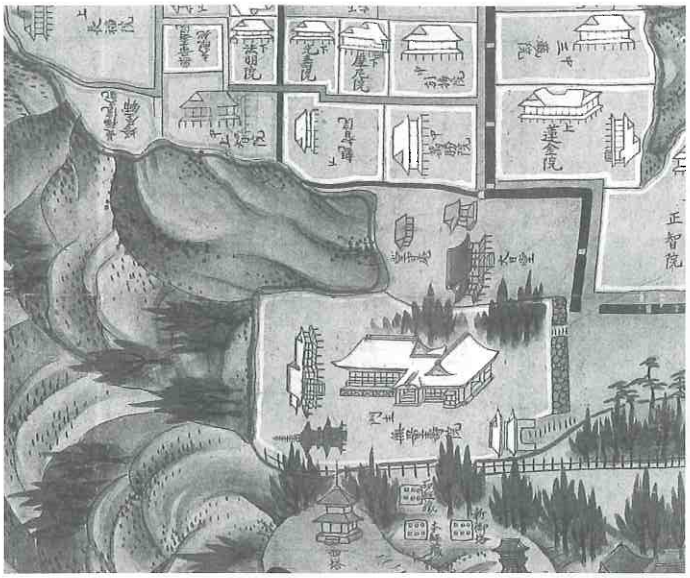
高野山霊宝館の新陳列館前室の左右に釣り鐘が展示されている。その二口の梵鐘のうち、向かって左側に展示されている梵鐘は、重文指定を受ける金剛峯寺伝来の永正元年（一五〇四）に元比叡山東坂本の生源寺の鐘として鋳造された伝歴をもつ梵鐘である。

坪井良平氏は、「高野山の梵鐘」において、この鐘を調査報告をされているので、かいつまんで紹介をしておきたい。

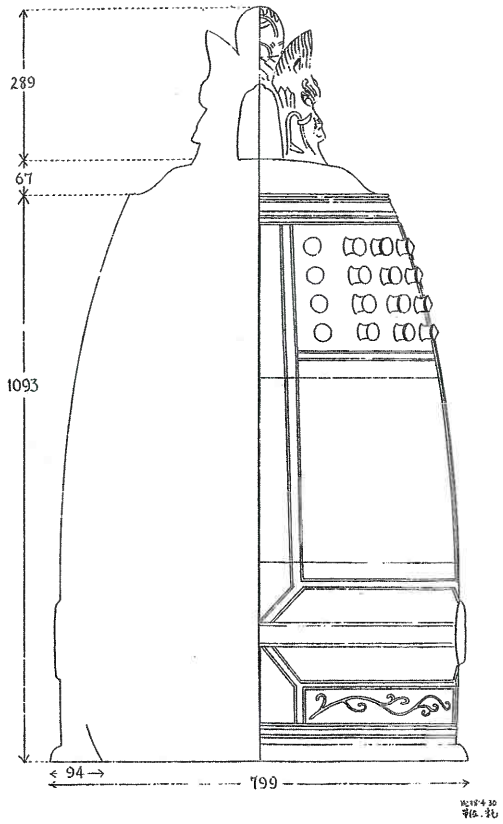


東坂本生源寺の梵鐘

坪井氏はこの梵鐘について『紀伊続風土記』巻之五十三の「大日堂」の項に、「大日堂は金剛心院といふ大伽藍なり旧記には金剛心院は天養元年宇治入道忠実公登山ありて建立ありし院なり」と記述があり、さらに大日堂の敷地にあった鐘楼堂について「永正年中鋳る所の鐘なり銘に東坂本生源寺とあり」と記述されていると紹介をされている。また、坪井氏は、この梵鐘は現在は霊宝館に収蔵されているが、かつて調査を実施した時には、龍光院の門内の池上に据えられていた頃に拓本を採ったことを報告している。大日堂は、現在の宝寿院の境内の一画に建てられていた堂で、明治二十一年（一八八八）の山上の大火災に伴って行われた寺院の統廃合の整理で取



高野山寺中絵図　金剛峯寺
図中の「無量寿院」とは現在の宝寿院であり、金剛心院大日堂はその北隣に位置していた。永正元年在銘梵鐘は、金剛心院の梵鐘として伝わっていたことが坪井氏によって明らかにされた。



り壊された。堂内に安置されていた大日・阿弥陀・釈迦の三尊は、一旦、壇上伽藍の大会堂に移され安置されたが、やがて、大正十年（一九二一）に開設された高野山霊宝館に収蔵保管された。これらの三尊像は金剛峯寺所有となり重文指定を受けている。大日堂の鐘楼も同時に取り壊されたようで、釣られていた梵鐘は一時的に龍光院の境内に保管されていたようである。やがて、高野山霊宝館に収蔵され現在にいたった経緯がある。

鋳銅製の本梵鐘は、鐘身側面の曲線の張りが上部に近い位置にあるもので、梵鐘の姿としてはやや特異な姿がみられる。この梵鐘には、永正元年（一五〇四）卯月（四月）八日に比叡山東坂本の生源寺の梵鐘として鋳造されたことを伝える陽鋳された銘文と、元亀二年（一五七一）の織田信長の比叡山攻めの焼討をうけ、明三年七月に高野山に移された際の勧進に応じた関係者九十五名の名前などが、漢字と仮名文字を用いて刻された陰刻の銘文が存在する。

坪井氏は生源寺の梵鐘について『太平記』巻第十七に物語が伝えられている有名なもので、南北朝時代の争乱の際に「新田義貞が後醍醐天皇を奉じて比叡山に立籠って足利尊氏軍と戦った時に、足利勢の襲来を伝えんがために、猿が群をなして生源寺に来たって鐘を撞いた」と南北朝時代の争乱の際に起こった逸話に登場する梵鐘であるとし、その逸話の内容の真偽はともかくとして、この梵鐘がその後継者であるかと思うと感慨が深いと感想を述べられている。高野山は比叡山と異なって、紀伊山地の山岳霊場であったことから、この梵鐘のように戦火を逃れて各地から引き寄せられるように集まってきた宝物類の数々をそれぞれの信仰の証として大切に守り継がれて来た。この梵鐘からも高野山は「山の正倉院」と称されるに相応しい信仰霊場の歴史を歩んで来た姿がかいまみることが出来よう。

二面の仇討ちの図

(甲)

(乙)

高野町神谷地区には、「高野の仇討ちの図」と呼ばれる二面の額絵が伝わっています（写真甲乙）。甲面には、大きな岩に身を潜めて一行を待ち伏せをする状況が描かれ、一方の乙面には、両者入り乱れて戦う場面が描かれています。

本図は明治四年（一八七一）二月三十日（旧暦）、神谷で実際に起こった仇討ちの様子を描いているもので、仇討ち自体は、「高野の仇討ち」「黒石の讐討ち」などと呼ばれています。

この事件をきっかけとして、明治六年（一八七三）に復讐（仇討）禁止令が発布されましたので、事実上、我が国最後の仇討ちとして、その名を留めることとなりました。

画賛について

仇討ちの図の画面右上にはそれぞれ色紙型があって、次のような画賛が記されています。

「呼賊呼奸彼　一時勤王佐　幕共非私感　情相激相生」

「殺両党心衷　両耐悲　高野山中弔（吊）故　赤穂藩勤王　諸士

墓　明治三十六年夏　正二位伯爵土方久元」

賛の大意ですが、「彼らは互いに賊であるとか悪い者と呼び合うが、その時は天皇に忠義を尽くす勤王派や幕府の存続を支持する佐幕派の者達であって、私欲で動いているのではない。激情してお互いに殺し合うことになってしまった。両党の心中を思うと、どちらが正しく、どちらが間違いというものではない。悲しいことだ」といったような意味でしょうか。

賛の末からは、土方久元伯爵（一八三三～一九一八）が、明治三十六年（一九〇三）に記したことが分かります。伯爵は土佐藩勤王党の志士で、明治維新政府の要職を歴任した人物として知られています。

仇討ち事件直後には、「赤穂藩敵討次第」と題して瓦版が刷られるなど、当時の人々の関心の高さがうかがえます。通常こうした出来事は、親の仇を討った側の美談として捉えられる傾向にあります。

伯爵がどのような経緯で両額絵に賛を記したのかは明確ではありません。しかしその内容からは、若い頃、勤王派であった伯爵としては、どちらかが善でどちらかが悪であるなどと決めつける風潮を、幾分かでも緩和したかったのではないか、そんな風にも思えてくるのです。

伝来について

その昔、黒石付近には、観音茶屋（忠義茶屋）と呼ばれた茶店があったそうです。なんでも仇討ち事件の二～三年後に開業したのだそうで、その店先には、芝居の絵看板のような仇討ち場面の絵を掲げていたことが、明治四十五年の大阪朝日新聞紙上に連載された「作水峠補遺」に記されています。

また観音茶屋とは別に、仇討ちで亡くなった七士の墓の横にも茶屋があって、ここでも仇討ちの絵看板が置かれていたといいます。

さらに、「明治の仇討ち　神谷宿」北尾清一氏著には、仇討ちの絵看板は、高野下から神谷に登る街道筋（新高野街道）の茶屋にもあったことが記されています。つまり一連の絵看板は、明治期から昭和にかけて二～三カ所の茶屋にあったことがわかります。

今回、仇討ち図の調査に際してお世話になった岡田里明氏によりますと、本図は新高野街道筋の茶屋方に伝わっていたらしいということです。

昭和四十二年発行の『高野の血斗』立石清一氏著には、本図が「二双のマクラビョウブ」であるとしています。当時は額装ではなく、屏風仕立てであったとすると、茶屋の店先に掲げていたものではないことにもなります。本図が店先に掲げられていたものか、枕屏風であったかは、現時点では不明としておきたいと思います。

西郷村絵図　江戸時代
「ビ・・観音」とあるのが、岩吉が運ばれた観音堂だと思われます。壮絶な戦闘は黒岩と鳥居の間で行われました。

仇討ちに至るまで

幕末の動乱期、赤穂藩（兵庫県）の下級武士十三名（急進派・勤王派）が、同じ赤穂藩家老、森主税とその師、村上真輔（保守派・佐幕派）を暗殺するといった事件が起こりました。いわゆるお家騒動で、従来より、森継之丞の派閥と森主税等との対立による家督相続争いと、幕末における勤王佐幕などの思想が絡みあって、文久二年（一八七一）二月三十日（旧暦）に起こった出来事として捉えられています。

下級武士が藩の重臣を暗殺するなどといった暴挙は、大罪となるのが通常です。しかし、村上真輔などによって失脚させられていた森継之丞が藩政に復帰したことで、下級武士側にはおとがめもないまま赤穂から脱出します。この時、土佐藩士が下級武士達の味方となっていました。

一方、家老側の村上家は、お家閉門断絶といった、およそ公平ではない裁定が下されました。この時点では、家老の暗殺自体が正当化されていたことを物語っています。

ところが一年後、下級武士達が帰藩してみると、藩の態勢と世論が変っており、全員が投獄されてしまいます。下級武士達にしてみ

黒石　道の斜面上には大石があって、道路横にある方が黒石です。仇討ち図（甲）では村上側三人が黒石に潜んで描かれていますが、実際には津田勉のみが小さな黒石の後ろに身を伏せていたようです。黒石は道の拡張に伴って幾分小さくなったといわれています。

黒石とは道路の反対側の斜面にある大岩。
村上四郎、行蔵の二人は、大岩の後ろに短槍を持って身を伏せていたようです。

ると、藩政を革新する目的で家老を暗殺したはずが、その大義名分を失っていることになりました。

下級武士達は脱藩、逃亡しなければならない状態におちいります。以降、自害する者が出たり斬殺されたりで、当初十三名だったものが、六名まで減ってしまいました。

世は明治維新となり、朝廷からの恩赦（おんしゃ）もあって、村上家断絶の処分が解かれ、お家再興が許されました。この時、村上真輔の子息（村上兄弟）達は復讐の意志をさらに固め、藩に対して仇討ちの許可を再三求めるようになります。

明治期に入って統治能力が低下しつつあった藩としては、家老暗殺事件を穏便に片付けようとします。そこで、下級武士達を赤穂藩森家の墓守り役と称して、高野山の釈迦文院へ預ける策をとりました。

従来、高野山という地域は、余程の外圧などが無い限り、犯罪者であっても、生命の安全が保証された特異な場所として認識されていました。

高野山へ逃げ込むといった事前情報を察知した村上兄弟は、なんとしても、彼らが入山する前に本懐を果たすべく、準備を進めることになります。

明治時代末期頃の黒石　紀伊名所図絵より
のどかな尾根道で起こった仇討ちは、地元の人達にとっては降って湧いたような大事件でした。その後、6名の首が並べられた松の木の下を通る際には、三種類の木の枝を供えたといわれています。

仇討ち状況

下級武士達一行の先回りをした村上兄弟他総勢八名は、地元で「黒石」と呼ばれる大岩のある峠を決戦場所とし、村上四郎・行蔵、津田勉の三人が黒石付近に布陣します。そして、午前十時頃から約三十分間にわたり、壮絶な戦いが繰りひろげられたといわれています。

不意をつかれた下級武士側六名は全員が討ち取られ、それぞれの首が黒石横の松の根元に並べられました。

ところで、下級武士一行の中には岩吉という十三歳の少年も加わっていました。直接的には無関係だった岩吉でしたが、戦闘中、運悪く首に深い傷を受けて、近くの観音堂まで運ばれ手当を受けましたが絶命します。同行していた兄の名前を呼びつつ亡くなった岩吉。その最期を看取った村人たちは、涙を禁じ得なかったそうです。

こうして黒石付近では都合七名

霊宝館初代主事　井村米太郎（号 真琴）
（1861～1930）　下名迫氏提供

が亡くなり、一方の村上兄弟側は、重傷三名、負傷二名という結果となりました。

その後

仇討ちが行われた時期は、封建制から法治国家へと移行する段階でもありました。それ以前は、認められれば合法的であった仇討ちですが、近代国家の前では、野蛮で、法の秩序を乱す行為とみなされます。しかも、仇討ち事件の起こる約半年前の明治三年（一八七〇）七月には、「殺生は天下の大禁」とする法律が敷かれたばかりだったのです。

村上兄弟達は、およそ、死罪を免れないのは覚悟の上だったのかも知れません。しかし実際には、禁固十年の刑が大阪裁判所で確定し、最終的には、全員ほぼ四年で刑期を終えています。

減刑になった理由の一つには、西郷隆盛への嘆願が認められたことが大きかったともいわれています。また助命運動も盛んであったとし、当時の人々の仇討ちに対する心情を見てとることができます。

こぼれ話

大阪朝日新聞紙上に連載された「作水峠」の記者大江素夫氏は、仇討ちの当事者である村上四郎に面会して聴き取りをするなど、仇討ちに関する綿密な調査を行っています。

現地調査に際しては高野山へも登山し、後に霊宝館初代主事となった井村米太郎にも、仇討ちの記録を尋ねていることが「作水峠補遺」に記されています。

井村主事は、金剛峯寺での勤務のかたわら、高野山の歴史書などを数種出版するなど、地元では博識で歌人としても知られた人物でした。当時、朝日新聞社本社の通信員もしていたことから、仇討ち事件についても詳しかったことが分かります。

殉難七士の墓
七人の遺体が葬られ、六基の墓石が建っています。現在も地元の人達によって手厚く守られています。

おわりに

土方伯爵の画賛のとおり、討つ側、討たれる側の双方共、藩のため、お国のためと、私利私欲で行動したものではなかったのかも知れません。二面の仇討ちの図は、両者の想いを今に伝える貴重な資料ということができます。

仇討ちで亡くなった下級武士達の墓は、黒石から数百メートル離れた山肌を削ったような場所にあります。十三歳で亡くなった岩吉は、兄、運六と共に葬られ、現在、六基の墓石がひっそりと並んで建っています。およそ一三五年前の出来事でした。

（M）

九度山町河根から千石橋を渡って高野山へと向かう街道を京・大坂街道といい、神谷地区はその中間にあたります。明治、大正期には大変な賑わいを見せた宿場街でもありました。

時事

【屋根改修工事】

霊宝館旧館は大正十年に完成し、八十年以上風雨にたえてきましたが、しっくいの剥落や雨漏りなど、腐食がはなはだしく、改修工事が行われました。

【本棚設置】

新館二室では、皆様に過去の大宝蔵展図録を拝見してもらえるよう本棚を設置しました。

【迎賓館改修工事】

旧管理棟として利用されていた迎賓館を新たに使用するための改修工事が六月から開始されました。

展覧会回顧

高野山の如来像

平成八年開催

¥2000

主な出陳品

・金銀字一切経（大般涅槃経後分巻上・下）（書跡）
・諸尊仏龕（彫刻）
・阿弥陀聖衆来迎図（絵画）
・阿弥陀如来坐像（彫刻）
・金剛薩埵像（絵画）
・覚禅抄（了性筆）一字金輪法（書跡）

展覧会内容

仏さまの種類の中で最も悟りを開いているとされる如来像を取り挙げた展覧会。高野山で信仰を集めた如来像の名品を紹介した。

図録内容

本図録は如来像を紹介しているシリーズ本。釈迦・薬師・阿弥陀・大日・曼荼羅などを項目別にして写真紹介。仏画などに記されている制作年代などの銘文も掲載。

霊宝館販売品のご案内

霊宝館では現在100種類ほどの物品を販売しております。今回、両界曼荼羅図の中サイズがほしいとお客様の要望が多数あったため新たに制作しました。額とセットの商品も新しく制作しました。

■両界曼荼羅

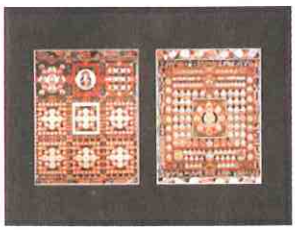
中サイズ　2紙1組（縦48・7cm　横37・5cm）　¥6000

中サイズと額セット　¥20000

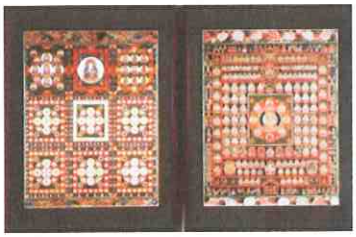
B4額絵と額セット　¥8500

曼荼羅　金剛界

曼荼羅　胎蔵界



曼荼羅（額絵）と額セット



曼荼羅（中）と額セット

紫雲放光

平成十六年七月一日に高野山が世界遺産に登録され早二年が経ちました。月日が経つのは早いもので高野山霊宝館でも、第二七回目の夏の大宝蔵展がいよいよ開催されようとしています。

霊宝館では四月一日から拝観時間が変更となり、五月一日～十月三十一日までは五時三十分と、一時間延長され、ゆとりをもって拝観して頂けるようになりました。高野山にお参りの際には是非お立ち寄り下さい。（S）